

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 24 年 6 月 5 日現在

機関番号：32601

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21510269

研究課題名（和文） 宗教と国家：スペインにおける戦争犠牲者の祈念をめぐる一考察

研究課題名（英文） Religion and State: A Study of the Commemoration of the War Dead in Spain.

研究代表者

渡邊 千秋 (WATANABE CHIAKI)

青山学院大学・国際政治経済学部・教授

研究者番号：00292459

研究成果の概要（和文）：本研究は、「現代社会において宗教は戦争の犠牲者をどう祈念するのか」という命題を、スペイン・カトリック教会によるスペイン内戦の戦没者祈念のあり方と宗教・政治との関係性に焦点をあてて解明した。政教関係に関連した諸文書の内容分析や教会聖職者等関係者へのインタビューなど、研究期間中に行った一連の活動を通じて、1975年の民主化以降今日に至るまでカトリック教会の内戦観は多様化し、政教関係の変化とともにカトリック教会による戦没者祈念の形も変貌を遂げている状況が本研究を通じて明示された。

研究成果の概要（英文）：This study explored how religion commemorates war victims in the context of Spanish Catholic Church, in particular its commemoration of the war dead during the Spanish Civil War and its relations with politics. Based on content analyses of documents on Church-State relations and interviews with Church Clergies, the study revealed that the Catholic Church's views of the Spanish Civil War since 1975 to present have been diversified. This study also showed that in accordance with the change of Church-State relations, the Church's commemoration of the war dead has also been transformed to contemporary forms.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2010年度	1,200,000	360,000	1,560,000
2011年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：地域研究

科研費の分科・細目：地域研究・地域研究

キーワード：西洋史、宗教学、集合的記憶、カトリック教会、記念碑、アイデンティティ

1. 研究開始当初の背景

本研究計画作成時には、社会労働党政権による「歴史的記憶法」施行(2007年)により、スペイン内戦やフランコ独裁体制を称揚する記念碑や銅像等のオブジェなどが公的な

場・空間から撤去されることが予想されていた。そのようにして、同政権は「歴史的記憶法」を通じて、過去の歴史を乗り越えつつ、新たな世俗の世界観によるスペイン内戦戦没者の定義と再考を行おうとしていたので

あった。

しかしこの「歴史的記憶法」の適用をめぐることは、フランコ独裁体制下で特権的な恩恵を受けていたカトリック教会の中には、冷静に民主主義のもとでの法制化のプロセスを受け入れようとする動きが存在する一方で、一度眠った独裁の記憶を再び呼び起こすことは教会に悪い影響を及ぼすに違いない、という懸念の声も聞かれた。ゆえに、カトリック教会がその私的な空間に保有する記念碑等オブジェに対する処置をめぐることも、聖職者はもちろん、信徒の中にも、さまざまな反応・対応が見られたのである。

確かに、1975年の民主化以降、スペイン・カトリック教会は社会の現状に対応し、ローマ・カトリック教の非国教化を受け入れて現在にいたっている。しかし教会内には、教会とスペイン社会・政治との関係性をめぐってさまざまな意見が混在しているのが現実である。そのような、教会内部にあったスペイン内戦をめぐる価値観の相違が「歴史的記憶法」により顕在化したといえよう。

ところで、確かに宗教団体としてのカトリック教会は、国には属さない「私的空間」に展開する組織体であるため、「歴史的記憶法」に定められた処置がどこまで適用の範囲内であるのか、また世論の影響によってどこまで処理が進むのか、様々な面で不明確な部分が多かった。

そこで、スペイン内戦終結後、フランコ独裁体制を支えるアイデンティティを形作り人々の精神的支柱となったカトリック教会が過去においてどのように戦没者を祀っていたか、また現在の国家宗教ではなく数ある宗教の1つとしての社会的地位に対応しながら、「歴史的記憶法」をめぐる過去への応答責任を果たすのかを考察することに大きな意義が認められると考え、本研究を開始したのである。

2. 研究の目的

項目1で述べたような状況を背景に、本研究は、世俗化の進む現代社会において、過去の内戦原因を作り出したアクターのうちの1つであったカトリック教会が、現代では内戦の記憶をどのように克服しようとしているのか、また現実に政治からのアプローチとしての「歴史的記憶法」や世論の要求にどのように応答するのかを、教会・聖職者等の行動と言動を考察し、宗教的コンフリクトとしてのスペイン内戦の歴史的経緯を明らかにしようとするものであった。

戦後70年余を経て、内戦での戦没者の追悼・祈念が市井の人々のあいだで再びとりあげられるようになった。それはとりもなおさず社会労働党政権が定めた「歴史的記憶法」の施行によるところが大きい、そのように

反応があるということから、内戦をめぐるスペイン社会の集合的記憶があらためて問い直されているのだと理解できる。そこで、本研究は、カトリック教会による戦没者の追悼がどのような政治的背景をもつのかをこれまでの先行研究や一次史料を歴史学的に再考することによって記録しなおそうとする。また過去に内戦という巨大なコンフリクトを生んだスペイン国家と宗教の関係性や、世俗化の進展する現代社会における両者の共存の可能性・またその上での問題点などを明らかにし、将来的な比較研究の基礎を作ること全体を目標とした。そのためには、「歴史的記憶法」という法の拘束力によって現れるはずの記念碑の「終焉」がどのような形で起こるか、それぞれについて記録しその傾向を分析することにより、スペイン社会の世俗化の進行度をはかる指標の一つを作ることによって貢献できるものと考えたのである。

スペイン内戦はいまだにスペインの人々のあいだに大きなしこりを残す過去の暗い歴史の一部である。そこで、広く人類的な課題とも考えられる視点を研究にもたせること、つまり世俗的社会における諸宗教間、もしくは信仰をもたないものと信仰者の共存共生はどのようにすれば可能になるのか、また共存を妨げる問題点はなにか、といった疑問に答えるに足る研究を行うことを目指したのであった。

3. 研究の方法

本研究においては、歴史学の方法論にしたがって先行研究から、まずスペインにおける政教関係の変遷を明らかにした。なかでも2007年の「歴史的記憶法」の条項を確認したのち、その制定以前にさかのぼり、いったい教会においてはどのような記念碑がスペイン内戦を祈念するものとして使用されているのか、また誰が犠牲者として捉えられているのか、政治的過程・宗教的文脈の双方から確認した。

次に、現地に渡航し、スペイン内戦以降に作られた教会関連の記念碑の存在を把握した。そうして確認できた記念碑に関しては現場で写真を撮影し、戦没者をいかに表象するのか考察するため、特に文言や特殊な意匠があるものに関してはその言説分析を行うものとした。

当初は、マドリードとバルセロナ、2つの大司教区を対象として教区教会での戦没者記念碑の扱いや行事の在り方を、具体例を挙げて考察するつもりであった。この2つの地域に注目したのは、これら地域での状況を比較対照するためである。マドリードはいうまでもなく首都であり、マドリード司教区には現代スペイン・カトリック教会の中核機能がある。またバルセロナ司教区は「進んだ」カ

トリズムを標榜すると先行研究で述べられる土地柄でもあり、またフランコ独裁体制下でも反体制運動を展開する勢力のあった地域であったことから、対象地域の選択は正当であったと考える。

まずマドリードにおける教区教会の所在地や実際の記念碑の所在確認を行い、映像関連のメディアに記録しつつ、記念碑にある文言の言説分析を行った。ところが、既に述べたとおり、当初の計画ではバルセロナ司教区を調査対象として念頭においていた。しかし、既に具体例として取り上げるべき教会関連の記念碑の撤去が予想以上に進んでしまっていることが判明したのであった。そこでバルセロナ司教区と同じカタルーニャ地方に存在するがまだ端的な例が見られるトルトサ司教区での調査を検討し、当初の計画を変更しながらも調査に着手するにいたったのであった。

また、どこに、なにが、どのような背景でいつ作られ、これまでどう利用されてきたのかを明らかにするため、現地教会組織・関係者とコンタクトをとり、インタビューなどを行うとともに、実物の確認を行う必要があった。また教区教会の現状を知るため、現地研究者との意見交換をとおして、テスト的下準備を進め、マドリードの全教区教会司祭に対して書面でのアンケート調査を行った。加えて、スペイン・カトリック教会の戦争犠牲者をめぐる公式の言説を、聖職者の司牧書簡や司教協議会の記録等の公文書から分析を試みるものとした。

4. 研究成果

まず、具体的に、マドリードにおける教区教会の地理的広がりの確認を行った。それにより、スペイン内戦時と現在のマドリード大司教区の範囲が異なることにみられる戦没者追悼の特色が明らかになった。また教区教会ごとに記念碑等の撤去状況には大きな差があり、個別に具体例を見ていく必要があることが明らかとなった。詳細に関しては、項目5に挙げる成果論文リストの(1)として引用する雑誌論文に論じられている。

マドリードを中心に、実際に所在が確認された記念碑に関しては現場へ出向き写真を撮影した。そしてそれらを比較した結果、その文言等には差異があり、すべてが画一的な形態のものであるとはいえないことがわかった。内戦直後、ファランヘ党など政治の側とカトリック教会との意図が重なったことにより記念碑が建立されたのだが、教会側は戦没者追悼に関する政治主導の状況をよしとせず、戦没者追悼の政治化を全面的に受け入れたわけではなかったのだ。文献から読み取ることのできる、また実際の現地調査によって発見された、表向きは政治的に統一

された形態の網の目をくぐるようなさまざまな意匠や工夫を教会側が記念碑にもたせている状況からも、政教の間で、内戦戦没者を祈念する姿勢・意味づけに差異があったことが証明された。

マドリードでの教区教会における聖職者へのインタビュー調査やその他内戦当時のことを記憶する信徒へのインタビュー調査等を実施し、現代において人々が内戦を祈念する形態は多様であるが、特にカトリック教会は、自分たちの内なる戦没者への追悼の念を目に見える形で表現するため、あらたな記念碑を作る傾向にもあることを確認することができた。

なお、既に指摘したことではあるが、バルセロナ司教区での調査が予想通りには進まなかったことにより、二つの大司教区の比較は行うことができなかったことは非常に残念である。しかしながら、同じカタルーニャ地方のトルトサ司教区での調査に着手したので、今後はこの地域での現状把握につとめ、研究を進める予定でいる。

スペイン・カトリック教会の高位聖職者の考えを知る機会として、元バルセロナ大司教カルレス枢機卿へのインタビューが実現したことはこの調査研究を進める上での大きな成果であったといえる。このインタビューを通じて、内戦下殺害された聖職者に対しては、当時の、そして現代のカトリック教会がその追悼を最重要事項と考えていることが明らかになった。

またマドリードにある教区教会を対象としておこなったアンケート調査や教区司祭へのインタビューなどから、現代のスペイン・カトリック教会の聖職者や信徒のなかには、内戦を相対化する動向、また勝者としての立場から内戦を考え発言する連鎖からぬけようとする動向もみられることが明らかになった。内戦をどのように祈念するのかをめぐって、同じカトリック教会の聖職者や信徒でも異なるとらえ方があり、新たに「内なる」葛藤が生まれていることも改めて実感された。よって、研究者は、地道な研究を通じて、カトリック教会は内戦に関する問題には保守的な言動しかとらない、といったステレオタイプ的な理解からの知識の解放を目指さねばならない。今後は特に、スペイン内戦を祈念する教会の姿勢に関しては鳥瞰図的な全体像と、具体的なケーススタディを通じてみえてきた諸相とにわけて論じることが必要であると思われる。

本研究期間中は現地研究者との密なコンタクトをとることができた。たとえば、アルカラ・デ・エナーレス大学文学部教授フェリシアーノ・モンテロ博士、スペイン・カトリックジャーナリスト連盟(UCIPE)副連盟長フェルナンド・セグ・マルティン氏などから、

一連の作業に関する具体的かつ有益なアドバイスを研究協力を得たことにより、現地での教区教会記念碑に関するリサーチや聖職者とのコンタクトをとる、といった作業を効率よく進めることができたといえる。また2010年8月、アルカラ・デ・エナーレスの中等教育機関で歴史科目の教鞭をとるペドロ・バルソ氏を通じて、ブルゴス郊外にあるラ・ペドラハという村落で行われていた、「歴史的記憶法」によって作業が進行中であった、内戦でフランコ陣営側によって殺害された人々が埋められた共同墓穴を発掘する現場を見学することもできた。実際の現場がどのように機能したそこではどういった状況に人々が対峙しているのかを知ることができたこと、また内戦で殺害された人々の遺族や現場で作業を進める人々が「歴史的記憶法」についてどのように考えているのか、特に発掘に関係する考古学者や医師などの考えを知るうえでも、この見学は大変有益な経験となったといえる。なお、この経験を通じて得た考察は、成果論文リスト(2)の論文として公刊された。

スペイン内戦・フランコ独裁を支える精神的支柱となったカトリック教会は、内戦で没した聖職者や信徒など自らの関係者を列福・列聖して「内なる」戦没者の死と犠牲を公式に認定することにより、国家宗教であったころからの内戦理解を引き継いでいる。しかし内なる戦没者を祈念するために作られた記念碑等の撤去を行った教区教会も存在しているのが現状であり、その撤去の形にも様々あるため、事態は複雑になっている。また近年、内なる戦没者の記念碑を新しく教会内部に建立する動きも出ており、教会のスペイン内戦に関連する記念碑等は、その形を変えながら再生産されている。このような戦争犠牲者の祈念をめぐるメンタリティにみられる複雑な様相を考慮しながら、今後は近年建造数を増す世俗的な記念碑や記念行事セレモニーなどの開催形態の具体例をも調査対象としつつ、本研究で考察してきた宗教的な内戦祈念のあり方との比較対照分析を行うことにより、戦没者祈念の在り方における「聖と俗」の重層的様相を考察していきたいと考える。今後は、本研究期間中に得た見識を基礎としながら、より詳細な個別研究を継続する必要があることを実感している。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計6件)

(1) 渡邊千秋「スペイン内戦の記憶、その過去と現在：マドリッドにおけるカトリック教

区教会保有の石板プレートに関する一考察」『青山国際政経論集』87号, pp. 37-60, 2012年5月, 査読無.

(2) 渡邊千秋「ラ・ペドラハ」共同墓穴発掘現場を見学して」『現代史研究』57号, pp. 87-94, 2011年12月, 査読無.

(3) 渡邊千秋「現代スペイン社会における社会心性としての『世俗化』：公共の場からの十字架撤去をめぐる」『青山国際政経論集』85号, pp. 141-155, 2011年9月, 査読無.

同「集合的記憶の場としてのスペイン内戦：

(4) 渡邊千秋「スペイン内戦を死亡広告から考える—カトリック的青年層の個人史再考の試み」『青山国際政経論集』83号, pp. 65-88, 2011年1月, 査読無.

(5) 渡邊千秋「殉教者をめぐる史学研究上の論点整理の試み—日本とスペインのいくつかの事例から」『専修大学人文科学研究所月報』243号, pp. 1-12. 2010年2月, 査読無.

(6) 渡邊千秋「スペイン内戦期における男性のまなざし：カトリック的倫理観による看護婦像」『青山国際政経論集』80号, pp. 181-199, 2010年1月, 査読無.

[学会発表] (計1件)

渡邊千秋「教室における宗教的シンボルの利用をめぐる」日本カトリック神学会第22回大会2010年9月14日, 於カトリック神学院福岡キャンパス

[図書] (計2件)

(1) Masiá, Juan y Watanabe, Chiaki, "Capítulo 9. La sacralización sintoísta del estado", en Monclús, Antonio (ed.), *Teolgias en entredicho* (2012), UIMP, Campo de Gibraltar, pp. 141-151.

(2) Watanabe Chiaki "In pace come in guerra: Il clero nella formazione socio-religiosa dei giovani dell' Azione católica spagnola (1931-1939)", en Botti, Alfonso (ed), *Clero e guerre spagnole in età contemporanea (1808-1939)* (2011), Rubettino Editore, Soveria Mannelli, pp. 289-308.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

渡邊千秋 (WATANABE CHIAKI)

青山学院大学国際政治経済学部・教授

研究者番号：00292459